

## シリーズ大阪再発見VOL2 .

### 大阪の進化を語るミュージアム「此花区」

～西成鉄道からユニバーサル・スタジオ・ジャパンへ～

#### はじめに

この春、大阪此花区に、ユニバーサル・スタジオ・ジャパンが開幕した。この大規模テーマパークにより大阪の集客力が強化されることは間違いないが、アメリカ文化の遊園地ではなく本来の大阪のまちが、ビジターや住民をいかにもてなし充足感を与えることができるか、未開拓の部分が大きい。大阪の歴史・物語や個性を見直しいかに再編・再生させるか、その可能性を探る“大阪再発見”。以前の連載からしばらくお休みをいただいていたが、心新たに再開することにした。(以前の連載は、「大阪 水の都に浮かぶ劇場」(KBI出版)として一冊にまとめさせていただいた。ご高覧いただければ幸いです。)

大阪は、「国際集客都市」という目標を掲げているが、それには、交遊・迎賓基地であると同時に「ミュージアム文化都市」と呼べる程のホスピタリティの向上と発信機能が必要であろう。これらを意識しつつ未来への展望も試みたい。今回は、ユニバーサル・スタジオ・ジャパンで注目を浴びている此花区界隈を取り上げる。実はこの地域は、昔から大阪のまちの転換と進化を物語ってきたのである。

#### 1. 西成鉄道の開通から工業都市へ

歴史を振り返ってみよう。周辺を山に囲まれた大阪は上町台地をのぞくと半島状の浅い入り江であり、河川が運ぶ土砂で三角洲(デルタ)地帯が形成され、市街地へと成長した。徳川時代、急速に開墾が進み土地が沖合いにさらに伸びた。此花区はもともと葦のしげる渚であったが、寛永元年より四貫島・申・春日出・西島・恩貴島・西野・六軒屋・島屋・南・秀野・常吉の順で開墾され、全て徳川氏の直轄地としてその支配下に置かれた。<地図参照> 港津として豊臣時代から繁栄していた“伝法港(伝法口)”を除くと、この界隈のほとんどが一望千里の農業地帯であったが、明治期には、徐々に新事業が勃興する。

明治31年4月、西成鉄道株式会社による大阪 安治川口間が開通し、38年には安治川口より天保山間(43年に桜島駅と改称)まで延長、大阪築港工事も進行する中で、大小の工場が続出した。大正期には、大阪鉄工所、汽車製造株式会社、住友伸銅所、住友電線製造所、住友製鋼所、春日出発電所の大工場をはじめとする有力工場が集積し、これに桜島地区、安治川川岸地区の倉庫会社(三菱倉庫、東神倉庫、住友倉庫、浪華倉庫など)の発達とともに、大阪市における第一級工業区として成長した。

この時期、北港運河の開削、防波堤、護岸の築造・土地経営などの事業を行ったのが「北港土地株式会社」であるが、特にこの会社の中心であった住友家では、欧米の都市計画を参考にし、まず交通機関を整備し、西島は住宅地帯、島屋は工場地帯、北港埋め立て地は倉庫地帯、島船の埋立て地は海浜公園とする理想を抱いていた。実際、交通に関しては、大正13年市電が桜島まで開通、昭和2年に市バスが創始され、北港潮場の入浴客、海水浴客を目指して運転、阪神伝法線も昭和3年に千鳥橋から尼崎まで全通し、国鉄西成線も昭和6年11月野田・大阪市場間、昭和9年6月、梅田・桜島間に貨物船が開通し、同三月 大阪・桜島駅間に汽動車の運転が開始された。交通の利便を得て、農業区から工業街へ

と脱皮したことで、工員住宅も増設され、大正11年西島住宅248戸、春日出住宅197戸が完成している。

大正12年頃より戦争の進行に伴い、軍需工場が激増し大規模化すると同時に、軍需産業における交通輸送が重要な役割を担っていた。昭和12年12月1日、桜島町と港区の北海岸通りを連絡する渡船桜島丸が、午後9時頃職工九十余名をのせ安治川の中流に出た折、突風で転覆、52名の遭難者を出した。また昭和15年1月29日午前6時55分西成線安治川口駅構内島屋町踏み切りあたりで、工場通勤客を満載したガソリンカー（大阪駅発桜島駅行）最後部の車両が脱線し、ガソリントankに引火全焼、遭難者238名を出す大惨事となり、翌16年5月から大阪・桜島間の電車運転が開始されたのである。

以降、軍事施設が激増し、工場、突堤・倉庫・鉄道などほとんどが軍中心に利用された。朝夕の通勤労働者は車外にあふれんばかりの混雑であったため、昭和18年10月には城東線・西成線の直通運転が実施され、昭和19年9月には、西区と朝日橋をつなぐ「源兵衛渡し」が廃され「安治川河底トンネル」ができた。11月には、安治川口駅から島屋町北港地先まで貨物線も敷設された。このようにして物資の運搬もよりスムーズに行われるようになり、此花区は、軍需生産のまちとして隆盛を極めた。しかし、空襲や強烈な高潮などで打撃を受け、荒廃してしまう。区勢の復興はなかなか困難であり、ジェーン台風の被害もあったが、新たな府営住宅や工場跡地の市営住宅、高等学校の新設や四貫島商店街の復興、さらに国鉄桜島駅の新築や、安治川口駅の乗降場などが完成、区内の工場も西六社（住友電気、住友金属、住友化学、日立造船、汽車製造、大阪ガス）をはじめ徐々に復興が進み、往事の盛況を取り戻す方向へと伸びていた。

これらの重厚長大産業の工場は、まさに大阪の高度経済成長を支えてきた。しかし、バブル崩壊後、大阪の経済は低迷し、これまでの素材産業中心の構造転換を迫られることになった。それに伴い海外への生産移転も実施されたことで、工場は事業を縮小せざるをえなくなる。こうして広大な遊休地ができたが、これは此花区に限らず大阪湾ベイエリア一帯を占める工場地帯で起きた現象である。このベイエリアの活用を、大阪に残された“最後のフロンティア”にとらえ、自治体や経済界による「大阪湾ベイエリア開発推進協議会」が総合的な開発計画を提示したが、計画の具現化には時間がかかりそうである。

## 2. 国際集客都市 実現へむけて

ものづくりのまち、商業都市・産業都市であることを自負してきた大阪だが、経済の地盤沈下に直面し21世紀のまちのあり姿を展望する中で、脱工業化の道を目指そうという気運が強まってきた。その現れとして、例えば「大阪城400年まつり」（昭和57年）「御道筋パレード」（昭和58年～）があり、「国際花と緑の博覧会」（平成2年）の開催がある。以降も、「咲くやこの花館」という植物温室、「海遊館」という水族館、ATC（アジア太平洋トレードセンター）・WTC（ワールドトレードセンター）など、新たなコンセプトの集客スポットも誕生し、近年、アーバンリゾートを目指した都市基盤の整備が勢力的に進められてきた。

世界的な観光市場の急激な成長と都市間競争の激化が叫ばれ始めた折、平成5年、大阪にユニバーサル・スタジオ・ジャパン（以降「USJ」）が誘致されることが正式に表明されたのである。場所は、此花臨海部 島屋・桜島 の重工業地帯で、日立造船や住友金属

工業が立地するほぼ全域が候補地域であったが、日立造船は堺市へ工場移転を進めている工場用地を提供、住友金属も工場を集約して協力した。

この地区は、関西国際空港に直結する阪神高速道路・大阪湾岸線と大阪臨海部と都心部を結ぶ都市計画道路・桜島守口線とが結節する、都市構造上で重要な位置にある。重工業地帯でウォーターフロントの立地条件をもつこの地域に着目した大阪市は、産業構造・経済構造の変化への対応策として新たな開発に向けての区画整理の調査に着手していたが、「USJ」の誘致が決まると、改めてこの巨大テーマパークを核に此花西部臨海地区の見直しと整備に本格的に取り組み始めたのである。土地区画整備事業を中心に湾岸整備事業の他、JR 桜島線の複線化（新「ユニバーサルシティ駅」の設置・桜島駅の移転）、阪神高速オランプ、ユニバーサルシティウオーク等々、地元企業の協力を得ながら、莫大な投資を伴う挑戦に踏み切った訳である。

「USJ」の誘致は、ベイエリアの有効活用や大阪全体の経済効果をねらった大阪市の心意気の現れであり、大阪が工業都市から集客都市へと進化する一大契機となるのは間違いない。

### 3. 「ユニバーサル・スタジオ・ジャパン」周辺の試み

「USJ」の周辺にも楽しめる空間や仕掛けを演出して、ビジターに「USJ」のまち、此花をもっとよく知ってもらおうと、企業・住民が、行政と協力しながら、また独自でも新たな試みを始めている。「USJ」によって地元が活気づいている一面が見てとれる。

#### < 此花今昔物語 大阪浪漫 >

JR 桜島線沿い、安治川口とユニバーサルシティ駅間にあり、「USJ」に隣接する工場の壁面を活用して、地域の特色を紹介しようという企画が持ち上がった。進めているのは、「此花区西部まちなみ整備推進協議会」。此花区に工場を持つ企業や町会、商店会、区役所などで構成されており、事務局は区役所にある。

住友金属工業関西製造所の南側の壁450メートルを利用して、巨大パネル（縦2.5メートル、横3メートル）を展示する。題して「此花今昔物語」と「大阪浪漫」。「此花今昔物語」のコーナーでは、此花区の特色や歴史文化をテーマに、例えば、此花区と港区を結ぶ天保山の渡し船や、夏祭の「ふとん太鼓」、橋と水門、臨海部の工場地帯などを紹介、「大阪浪漫」のコーナーでは、大阪市の代表的な文化的建築やまち並み（大阪城・通天閣・道頓堀 など）を紹介。これらのパネルを映画フィルムのコマのような装飾で配置し、電車の車窓からも楽しめるよう、ユニバーサルシティエリアを意識した工夫が凝らされている。写真展示は、企業の協賛により、1コマ30万円。（維持・管理・保険料金を含む）。「大阪浪漫」の方は、大阪市観光協会により、協力・協賛を募っている。

#### 此花区役所 企画主幹 林達雄さん

平成11年秋頃から、「USJ」周辺の工場群の景観向上について、大阪市（当時の計画調整局景観計画課）と此花区と一緒に検討しており、同時に周辺企業にも景観整備への協力を呼びかけていました。

今回の企画は、平成12年秋から、大阪市・区役所・住友金属の3社で協議の上発案さ

れました。運営主体の協議会を平成13年の2月に立ち上げ、地元の企業を中心に協賛を呼びかけたところ、現在は約70点分集まっています。今後も140点になるまで取り組みを続けるつもりです。

此花区ではこれまで、ワークショップ形式で、区民と一緒にまち並み改善や、“わがまち再発見・まち探検”などの活動を行っており、平成13年からは、「トレイル散歩マップづくり」として、USJから西九条までの見所マップを作成していきたいと考えます。せっかく「USJ」ができて地元を素通りされてしまうのは、宣伝不足もあるでしょう。それを、区や区民でサポートしようというわけです。

此花区商店会長 村主伸策 さん（此花区西部まちなみ整備推進協議会メンバー）

「USJ」の事業効果は、地元の商店会にとってはあまり期待できないし、交通事情が悪くなるというマイナス面もあるのですが、今回、地域の住民や遠くから訪れる人を楽しませるように、商店街などの地元の人間と企業と行政が手をつないで、まちなみを整備するのはいいことなので、協力しています。遠くからのお客様に、地元大阪や此花の魅力をアピールできるいい機会だと考えています。

#### <フェンスとガスホルダーの デザイン制作 >

同区にある、大阪ガス（株）北港製造所は、所有地南側のフェンスに、景観デザインを制作した。「USJ」を核としたまちづくりに景観面から積極的な協力を試み、都市ガス工場への違和感を和らげようというものである。特に阪神高速湾岸線からUSJへの車でのアクセスの場合、ほとんどが製造所前を通過するため、車からの視線が重視された。

フェンスのデザインテーマは“「人と生き物」の躍動と形態変化”。地球環境との共生を重視する大阪ガス、グローブ（地球）をシンボルマークとするUSJと調和し、誰にも親しみやすい人と生き物がデザインモチーフとなっている。フェンスのパイプに絵柄をペイントし、見る側の動きや視線に対応した、道なりの場面を展開している。自動車からの視線を意識した「ロード・シークエンス」という手法を採用。行き方、来る方、双方から「生き物」の姿が徐々に結像し、再びバラけていく様子が楽しめ、走る速さによってもその変化は異なり、自分の動きを感じることもできる。

また、同製造所内のマン式ホルダー（ガスタンク。高さ約80メートル）に、「USJ」「Heartful Osaka」と表示した看板も設置している。これは、このガスタンクが「USJ」園内から見えてしまうので、「USJ」側からの依頼で制作された。

#### <商店街の活性化 >

此花区には10の商店街がある。「USJ」効果については比較的冷静に捕らえているものの、この機会を活用して、賑わいをつくる試みも行われている。話題づくりによって、商店街自身が、「USJ」から元気をもらっているとも言えそうだ。

象徴的なのは、四貫島の商店街。四貫島本通商店街には、全長5メートルのサメの張りぼてが釣り下げられた。赤、青、黒、緑、黄色の5色のサメ。サメはジョーズにちなんだもので、5色には、オリンピックの5輪招致の願いもこめられているという。夕方からは、照明効果も手伝って、商店街の雰囲気華やいだ感じが増している。

サメを制作した本通り商店街の方はマスコミを全く意図しなかったのに対し、中央通り商店街の方は、マスコミ取材をきっかけとして、名物づくりに取り組んだという。いずれにしても、商店街の“看板”を広くアピールでき、それが街の元気に結びついた訳であり、マスコミに地域支援的な役割の可能性が大きいことにも気づかされる。

四貫島（本通り）商店街振興組合 結城長治 理事長

サメの制作は、商店街のアピールをしたかったから。どちらかと言えば地元の人を目をこちらに向けさせたかったんですね。その結果、「USJ」の名物の1つにでもなれば嬉しい。頑張っていれば、新しいお客さんが来てくれるかもしれない。今、それぞれのお店が「便乗セール」といって特價商品を設けており、できる限りサービスに努めていますよ。予想外にテレビや新聞に取り上げてもらって、やる気につながっています。

四貫島中央通商店街振興組合 大西勝重理事長

「USJ」オープンに際して何か話題が必要だと思い、私の和菓子屋の店では、恐竜まんじゅう「ジュラちゃん」を新たにつくり商標も取りました。また近所で「ターミネーター」ならぬ「たべてみてーなー」というアトラクション付のお好み焼きメニューをつくったり、本通りの寿司屋では「ジョーズなお寿司」も発売しています。テレビ取材がきっかけで「名物の1つもつくらなあかんわ」と、気のあう友人同士で考案したんですよ。反響はありますね。

「USJ」ができるようになった時から、地元の4つ（四貫島本通り・中央通り、住吉、森巢橋）の商店街から若い有志が集まって、ユニバーサル事業委員会（通称サミット）を立ち上げ、個々の商店街がいかにかUSJを絡めるか話し合いがもたれています。今はまだ話が具現化していませんが、可能性としては、インターネット事業や、「北港通り」を「ユニバーサル通り」に変えるなど、ネーミングを公募するとか（「北港通り」は愛称であり、地元の同意が得られたら変えることはできる）此花区の名物・食遊マップをつくるとか、サミット発の取り組みが期待できますね。

#### 4. ウォーターフロントに広がる住宅地

此花区は、大阪の産業を支える工場街であると同時に、川と港に囲まれたウォーターフロントという環境である。特に淀川沿いの西島地区と高見地区は、大阪市の中でも地域特性を生かした快適な居住空間整備地区として、重点的に取り組みが行われてきた。

まず西島地区について。河川沿いの工場跡地（面積約5.4ha）の活用や交通局施設の整備とあわせて、住宅地の整備が進められている。仮移転用のリノベーション住宅の建設を行い、西側に隣接する市営西島住宅（昭和29年度建設）をはじめとする周辺の公的賃貸住宅の建替えが行われている。バス車庫の上部も公社賃貸住宅として活用している。眺望のよい超高層住宅の建設とともにスーパー堤防の整備によって、淀川の景観を生活環境として取り込むのに成功しており、水の都大阪ならではの居住空間が実現している。

高見地区では、大規模工場跡地と木造住宅・小規模工場などが混在していた地域を再開発し、約52haの新たな住宅街としてイメージを一新した。四季の花が楽しめる公園も整備されており、「高見フローラルタウン」というイメージがそのまま反映されている。交

番・学校・スーパーも建設され、職住近接が可能な都市居住の快適性が実現している。季節ごとのイベント・行事などで、住民同士のコミュニティも徐々に育ってきているようである。

JR桜島線周辺の工場群のイメージからはかけ離れた、環境に恵まれた居住空間が此花区北部に整備されており、大阪全体に都市居住の可能性を印象づけている。

## 5. 廃棄物処分埋立地からスポーツアイランドへ

### < 舞洲の位置づけ >

昭和47年から62年にかけて、造成埋立により誕生した舞洲。計画当初は、大阪という大都市から排出されるごみ・廃棄物、土砂・残土等の緊急処分地としての役割が大きかったが、昭和48年の港湾法の改訂により、都市における廃棄物処理問題に関して積極的な解決の場を提供し、新たにできた埋立地を都市の将来計画に活用するという、大阪の港湾の新たな使命を担って、舞洲の取り組みは始まったのである。

その後、昭和60年に発表された、「テクノポート大阪」計画において、舞洲、咲洲、夢洲の臨海部の3つの島が、大阪の新たな発展を目指した新都心として位置づけられている。大阪が21世紀に向かって活力と魅力ある国際情報都市として発展するために、この臨海部に、「先端技術開発機能」「国際交易機能」「情報通信機能」を集約させ、21世紀の新しい都市核にふさわしい高次都市機能を集積するという計画であり、舞洲は、主に、文化・スポーツ・レクリエーション機能を受け持つ区域として設定された。

### < 水と緑のアーバンリゾート >

埋立地である舞洲約225haのうち西側の約13haに、“ウォーターフロントの立地特性を活用した大規模なスポーツレクリエーション施設を整備するとともにリゾート的環境を創出する”という大阪市の「スポーツアイランド計画」に基づき、平成2年、大阪港スポーツアイランド(株)が第3セクター方式で設立された。さらに、「オリンピック競技大会」の大阪招致宣言がなされ、舞洲が主会場候補地となり、「スポーツパラダイス大阪」構想の集大成としてまちづくりが進んでいる。とても都心と思えないほどの、自然環境に恵まれたフィールドが広がり、身も心も解放されて、スポーツをはじめとする野外活動や交流を楽しめる。まさに島がスポーツのテーマパークなのである。

また、舞洲の自然と人間の共生・調和をめざすシンボリック存在の「新夕陽ヶ丘」と南側水際線沿いの遊歩道「シーサイドプロムナード」が、日本夕景百選の中に選ばれており、夜景も美しいため若者のデートスポットになっている。(大阪には昔から夕陽信仰が根づいており、上町台地に「夕陽ヶ丘」という地名もある。)ここは21世紀の夕陽ヶ丘として恋人たちの伝説が生まれてほしい。イベントによる発信にも力を入れており、今春も、有名ミュージシャンが結集したコンサートや、市民公募参加型のアートマーケット、アート屋台など、若者の祭りが計画されている。

### < 自然との共生がテーマ。ごみ焼却工場 >

此花大橋を渡り舞洲へ入ってすぐ、おとぎの国を思わせる外観の大規模な建造物が目に入る。これがごみ焼却工場(仮称)環境事業局舞洲工場である。大阪市環境事業局が設備全般を企画管理し、建物に関しては、大阪市都市整備局が受け持った。

デザインは、オーストリアの画家・建築家である故フリーデンスライヒ・フンデルトバ

ッサー氏（平成12年2月に死去）によるものである。同氏は、環境保護建築、自然との共生をテーマにした作風を持ち、舞洲のエコアイランドとしてのまちづくりがびったり重なるということで採用された。舞洲の入り口にあるゴミ焼却工場がマイナスイメージを与えないように、工夫した結果である。フンデルトバッサ氏は、既にウーンのごみ焼却工場「シュピッテラウ工場」を手がけている。緑が生い茂るこの美しい工場は、観光名所や絵はがきとしても有名で、同氏の作品でゴミ焼却工場は世界でウーンと大阪の2例だけであり、大阪市が働きかけ、「シュピッテラウ工場」と姉妹提携をすることになった。

大阪市内には焼却工場が10工場あるが、老朽化が進んでいるため、順次規模の見直しと建替えを行う必要があり、その休止期間中の焼却作業を補うのが舞洲工場の主な役割である。平成13年4月末から本運転に入った。公害防止に最大限の努力を行い、費用の節約はもとより環境への配慮がなされている。また、これらの取り組みをわかりやすく紹介する見学コースを設定している。説明板や映像でのガイドや演出がかなり充実しており、ごみ処理過程等について、実感を伴いながら楽しく学べる場になっている。平成12年6月の竣工時から、見学受付は行われており、本運転開始までに既に6000人近くの希望者が訪れている。ゴミ焼却工場には珍しい程の集客力であり、今後観光名所になる可能性は大きい。環境問題への啓発という役割も期待できそうだ。

平成21年度完成予定の、汚泥集中処理場「舞洲スラッジセンター」もフンデルトバッサ氏によるデザインで、舞洲の芸術的建造物群として看板になりそうだ。

## 6．此花区は、大阪進化の語りべ

新田から姿を変えた工場街が、「USJ」の開幕で一躍イメージを一新し、周辺の企業や地元の住民が景観整備や賑わいづくりに積極的に取り組み始めている。淀川リバーサイドの水辺を生かした居住地の整備も、心地よい上質な都市居住の成功事例としては先駆的であり、舞洲は、“環境共生のスポーツパラダイス”として、住民もビジターも楽しめる集客機能を発揮している。今後、夢洲・咲洲をはじめとするベイエリアの発展で、まさに水都大阪の带状の新都心が生まれることが期待できる。

此花区の歩みをたどると、遠い昔から、大阪の成長や転換がまさにこの地域に凝縮して実現してきた軌跡が確認できた。上町台地から西方へ、八十島や三角州を形成しながら発達してきた大阪の町は、商業・工業の街として近代・近世とも時代の先端を走ってきたが、今、集客都市としてさらに前進し、同時に快適な都市居住空間を育みつつある。

また、西成鉄道（大阪 安治川口・桜島間）の開通が、大阪が重厚長大産業の集積地へと成長を遂げる一契機となったように、今日、ほぼ同じ路線であるJR桜島線（ゆめ咲線）の大阪 桜島直通ルートの新設（復活）により、「USJ」を核とした集客都市大阪への都市の進化に拍車がかかった。都市の転換へ開幕を告げるこの路線の役割も歴史を超えて繰り返されている。此花区は、大阪全体の歩みや方向性を即時的に表明・実現しており、都市の現代博物館のようでもある。

新田開発から工業都市として大阪の成長を支えた時代、そして今日「USJ」の誘致を経て、さらなるベイエリアの発展へ、此花区はその変貌をもって、大阪の歩みを象徴し、その挑戦と進化を語り表現するミュージアムとしての役割を今後も担っていくに違いない。

## 主な参考文献

此花区史

大阪市主要プロジェクト集2000

関西の鉄道NO37

鉄道ピクトリアルNO520

「大阪と鉄道」宮本政幸雑誌掲載抜粋冊子

日本鉄道史(鉄道省)

写真でみる此花区(市制100周年記念事業 此花区実行委員会)

大阪港スポーツアイランド株式会社10年のあゆみ

(写真キャプション)... メモなので、写真送付時に再度、指示します。

「新夕陽丘」は、360度の展望が可能で、夕陽などの眺望が見事であり、「舞洲緑道」は、約1kmある磯や、ジョギング・サイクリングコースがあり、エコロジー緑化手法を駆使した植栽など、変化に富んだ景色を楽しめる。

青少年や家族・仲間同士での野外活動や滞在を楽しむための、「舞洲野外活動センター」では、宿泊施設が整備され、ロッジやログキャビン、キャンプ場が充実している。

スポーツ・文化施設としては、多種多様なスポーツが楽しめ、ナイター施設も整備された「舞洲運動広場」(多目的グラウンド・球技場など)、世界規模での競技大会やイベントも可能な多目的体育館「舞洲アリーナ」、「舞洲ベースボールスタジアム」は、本格的な公式野球場である。

その他「シーサイドテニスガーデン」(テニスコート21面)

登り窯があり、市民の余暇活動や陶芸技術向上のための「舞洲陶芸館」

クルージングや釣り船の絶好の基地「舞洲マリンヤード」

モータースポーツの育成を目指す「舞洲グランプリパーク」

防災・輸送・報道取材など公共用を意図し、遊覧飛行も行う「舞洲ヘリポート」

写真キャプション（順不同。1～36の後にしてもよいか？）

1．此花区に誘致が実現した「ユニバーサル・スタジオ・ジャパン」

2．USJ エントランスゲート

3．USJ園内ではマスコットキャラクターにも会える

4．5．エレベーター昇降による安治川河底トンネル（プリント）

かつて、「源兵衛渡」があったところで、区内工業地帯へ激増する交通量をさばくため、10年の歳月をかけて昭和19年に完成。当初トンネルは歩行者用、車両用の2台のエレベーターまたは階段で河底に達する仕組みだった。現在は、人と自転車のみ通行できる。

6．「東洋のマンチェスター」の象徴、8本煙突の風景

重化学工業のまち「此花」の名物で、見る方向によって本数が異なってみえることから「お化け煙突」とも呼ばれて親しまれたが、昭和34年に姿を消し、現在は関西電力春日出発電所となっている。

（安治川左岸から見た春日出第2発電所） 写真でみる此花区 48ページ

下

6 2．西六社より（同上資料P46）

住友化学工業株式会社（日本染料 昭和10年頃か）

日立造船株式会社（昭和4年頃の大阪鉄工所）

7．住友金属工業の工場壁に設置されたパネル群「大阪浪漫」「此花物語」

8．大阪ガス北港製造所のフェンスデザイン

9．ガスタンクにも、「ユニバーサルスタジオジャパン」という看板が掲げられた

10．サメが出現した四貫島本通り商店街

11．淀川沿いの環境に恵まれた西島地区

12．高見フローラルタウン

13．360度の眺望と夕陽が見事な「新夕陽ヶ丘」（舞洲）

14．季節感あふれる花や樹木に囲まれ、子供たちが原っぱや砂場・大型木製遊具などで思い切り遊べる芝生広場、海辺の眺望を楽しみながら散策できるシーサイドプロムナード（写真）など、「舞洲緑地」では、自然浴が楽しめる。

15．スポーツ・文化施設としては、多種多様なスポーツが楽しめ、ナイター施設も整備された「舞洲運動広場」（多目的グラウンド・球技場など）、世界規模での競技大会やイベントも可能な多目的体育館「舞洲アリーナ」、「舞洲ベースボールスタジアム」（写真）は、本格的な公式野球場である

16．青少年や家族・仲間同士での野外活動や滞在を楽しむための、「舞洲野外活動センター」では、宿泊施設が整備され、ロジやログキャビン、キャンプ場が充実している。

17．登り窯があり、市民の余暇活動や陶芸技術向上のための、「舞洲陶芸館」

18．フンデルトヴァッサーデザインのごみ焼却工場「（仮称）環境事業局舞洲工場」